
心の痛み

お餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の痛み

【Nコード】

N2912BA

【作者名】

お餅

【あらすじ】

パトロールをさぼって昼寝をしていたカレーパンマン。しかしそれが原因でしょくぱんまんは大きな怪我をしてしまう…

カレーパンマン目線です

いい天気。今日も平和。

平和っていいことだけど、なんかこう…つまらない。
ばいきんまんも何たくらんでるのか分かんないけど全然悪いことし
ないし…

こんな平凡で何も無い時にパトロールって正直勿体ないよなあ。

「なんか、眠くなってきた…」

どうせパトロールしてたって暇なだけだしちょっと寝よう。そう思
った俺はひとけのない、日当たりのいい草原で寝ることにした。

…俺だけが知っている場所だ。

…

「…めてください!」

「…!」

この声は…

「…うーん…」

ずいぶん寝てしまったようだ。

もう太陽が隠れてしまっている。

…俺が寝ていた間何もなかったらしいけど。

そう思って立ちあがるうとしたとき、何か液状のものが手に触れた

「…?」

手を見てみると

「うわああああああ!!!!!!血っ血だああああ!!!」

驚いた俺は見渡した。誰か怪我人がいるのか!

「…!!しょくぱんまん!」

「うう…」

すぐそこですょくぱんまんが倒れていた。

血まみれで…服も破けていて…

血の匂いがした…

…気もち悪い。

ここから今すぐ逃げたかった気持ちを抑えて俺はしょくぱんまんをパン工場まで運ぼうとした

しょくぱんまんを抱えて空を飛ばうとした瞬間、バランスを崩した運悪く木の枝でマントが破れてしまった。

どうしよう…ここからパン工場までかなり距離がある。

民家なんてこのあたりにある筈がない…

こんなふうに考えていても何も始まらない、とりあえずパン工場まで頑張つて運ぼう

引きずるようにしてしよくパンマンを運ぶ俺。

…くそうなんで背が低いんだよ、俺は…

と、背が低いことを責めつつかなり時間はかかってけどパン工場についた。

バタコさんとジャムおじさんが大急ぎで2階で手当てをしている

1階で待っている俺とアンパンマン。

こんなときに何もできない俺が嫌だな…

アンパンマンも悲しそうな顔で階段を眺めている。

…アンパンマンも俺と同じことを考えているのだろうか。

どれくらい時間がかかったかは分からない。

しよくぱんまんは生死の境から見事脱出したようだ。

ジャムおじさんとバタコさんがしよくぱんまんの状態が落ち着いてきたから様子を見ても良いと言ったので俺とアンパンマンはしよくぱんまんの様子を見に行くことにした

しよくぱんまんが寝ているのは2階。普段アンパンマンが寝る場所でしよくぱんまんは眠っていた。

包帯がぐるぐる巻かれているしよくぱんまんはまるでミイラ男のようだ。

それから…点滴も打つてあった。

見るに痛々しい姿。ま、血まみれのしよくぱんまんと比べたらずいぶんましなだけだな。

「あと2時間早かったらもう少し軽傷で済んだのにねえ」

そう呟いたジャムおじさん…

もし…もし俺があの時寝ていなかったらしよくぱんまんはこんな酷

い目に会わなかったのだろうか
あるいは俺がさぼったりしないでパトロールをしていたらしょくぱんまんはこんな目に会わなかったのだろうか…
あれ…しょくぱんまんをここまで酷くさせたのは…俺？
…そういえば俺はいつも考えずに行動していたような気がする。
今回だってそう。ここ最近平和だったからといって油断してしまった俺がちゃんと見回りをしていたらしょくぱんまんがこんな目に会うのを防げていたのかもしれない。

…そういえば夢の中でもしょくぱんまんの声が聞こえた気がする…
近くに居たから、聞こえたんだろうな。

なのに…俺は…

俺ってヒーロー失格なのかな…

「カレーパンマン!!!」

「えっ!？」

アンパンマンの声で我に戻った。

「どうしたの？」

「ううん、何でもない!」

何でもない訳がない…でも、もしこのことをアンパンマンに話したら…

そう考えると怖くなって話すことはできなかった

「…ここは…」

「しょくぱんまん!」

「痛っ…」

そら動いたらいたいだろうさ。 見ているだけで痛々しい傷なんだから

「動いちゃ駄目だよ」

アンパンマンが言った

「そのようですね…もう少し安静にしとかないと」

そう言つて笑つたしよくぱんまん。本当は笑う余裕なんてないくらい激しい痛みが来ている筈…

…今は麻酔が効いてるのかなあ

「早いところ怪我を治してまた子供たちに美味しいパンを届けないと！」

…のんきな奴だぜ。

「治るには最低2週間はかかるよ」

ジヤムおじさんが言った

「えーっ！！その間給食のパンはどうしましょう…」

「俺が運んでやるよ」

「カレーパンマン…でも…」

「今は自分の体のことだけを考えるよ」

「…ありがとうございます」

今の俺はしよくぱんまんの手伝いをやることくらいしかできない

「僕も手伝うよ」

「サンキューアンパンマン」

こんなことで罪を償えるなら何回だってやってやるよ…

「あー疲れた！！」

「パンを運ぶのつて意外と大変だねえ」

給食のパンを運ぶのつて結構大変。

これをしよくぱんまん一人ですつとしてきたのか…

「じゃあパン工場に戻ろうか」

「ああ」

こうして俺たちはパン工場へ戻つて行つた

…ドスン

…ドスン

何か大きな音が聞こえる。この音は何だろう

「この音は何なんだ？」

窓を開けてみるとそこにはでっかいメカに乗ったばいきんまんがいた。

「はひふへほー！！！！」

「ばいきんまん！」

「どうだ？しよくぱんまんの様子は！」

「何故それを知っている！」

「しよくぱんまんをここまでさせたのは俺様だからなー！！」

「なんだって！？」

…そういえばこの機械にも少しだけだけど血の跡らしきものがあるしよくぱんまんの血だろうか

「ゆるさねえ！！」

パン工場に入れさせるわけにはいかない。入れるまでに倒さねば！

「アンパンチ！」

メカに向かってアンパンチをするアンパンマン…しかし硬いメカにはそんなの効かない

「そんなのきかないよーだ！くらえ！」

水鉄砲をくらったアンパンマンは顔が濡れてしまった

「アンパンマン！」

「顔が濡れて力が出ない…」

くそー！こんな時に限って！

「ジャムおじさーん！！新しい顔早く作ってくれー！！！！」

叫びながら俺はアンパンマンを運びながら逃げた

…このままじゃパン工場に行ってしまう！

俺はカレービューーをしてバイキンマンの視界をみえなくした

…しばらくはこれしかできなさそうだ

だが、すぐワイパーで視界を戻してしまう

早く顔を作ってくれ！俺のカレーが無くなる前に！

「うう…カ、カレーが…」

俺もカレー切れになってしまった。そろそろ限界だ

「アンパンマン！新しい顔よ！！」

投げた顔は見事に命中！アンパンマンは元気100倍になった

「アンパンチ！」

バイキンマンはメカと共に飛んで行った

流石顔を変えたてのアンパンマンは強いな…

俺はその後すぐカレーを補給した。やれやれ、不便な体だぜ

2週間の入院生活だった筈なのにしよくばんまんは1週間で元気になった。

「回復力すげえな…」

「早く元気にならないと…って思っていたら早く治ってしまいました」

「もうすこしゆっくりで大丈夫だったのに」

「そうはいきませんよ。皆さんに迷惑ばかりではいけませんし」

まあ、しよくばんまんが良くなったのなら、それでいいよ。

ふうっとため息をついた

「どうしたんですか？」

「いや、何でもないよ」

「カレーパンマンこの頃おかしいですよ」

「え？」

「元気ないって言うか…私を見たらいつも悲しそうな顔をしていますよ」

「そ…そんなことないよ」

そんなことなくない。俺って顔に出やすいタイプなのかな

「何でもない訳ないでしょう。きっと私も関係しているんでしょう？」

「…それは…」

何も言えなくなつて俺は逃げてしまった

「カレーパンマン！」

もう嫌だ。今の俺一番かつこ悪い…

心の傷はどんどん悪化していく。もうしょくぱんまんに見せる顔なんてないや…

気付けば俺は草原に来ていた

前は安らぎの場所だったけど…今になつてはトラウマの場所。草を見てみると少し血の跡があつた。

あの瞬間を思い出して…気もち悪い

「カレーパンマン！！」

「！！！」

俺はしょくぱんまんに背中を向けた

「やっぱりここだったんですね」

…やっぱり…何故分かつたんだろう

「カレーパンマンよくここにきてますしね」

「何でそれを知っているんだ…」

「よくみかけるんですよ。お昼寝してますよね」

…見てたのかよ…

「…カレーパンマン、有難う御座います」

「何故お礼を言うんだ…」

「私、かすかですが覚えてはいるんです。カレーパンマンが必死でここからパン工場まで運んでくれたのを。」

「あのなあ！俺はしょくぱんまんをあそこまで酷くさせた張本人だぞ！」

つい言つてしまった

「俺がここで寝てたりしてたから！してたからしょくぱんまんがずっと血まみれの状態でいたんだよ！」

「カレーパンマン…」

「もし…もしあの時寝ていなかったら…しょくぱんまんだつて生死

の境をさまよわなくなつてよかつたのに…俺は、俺は…」

「カレーパンマン！」

しよくぱんまんの声で我に返つた

「そんなの分らないじゃないですか。」

「夢の中で聞こえたんだよ…お前の声だ。だから多分近くに居たんだらう。なのに俺はのんきに…」

心の傷は痛む一方だつた

「そうですが…カレーパンマンは私を必死で運んでくれたんですよね」

「…」

「重傷だとか軽傷だとか、そんなの私には関係ありませんよ。私と結構身長差があるのに一生懸命運んでくれた優しいカレーパンマンにとても感謝しているんですよ！それに、もし、あなたがここで寝ていなければ2時間どころではなかつたのかもしれない。もしかしたら私はここにはいなかったかもしれない」

「…俺に優しくしないでくれよ…それに俺は優しくなんかないさ。怒りつぽいし、喧嘩はすぐするし…」

涙が出そうになるけどぐつよ堪える。くそう、しよくぱんまんめ…なんて事を言わせるんだ…

そうするとしよくぱんまんは俺の手を握ってくれた

「こんなに暖かい手をしているのに優しくない訳ないでしょう？」
今の言葉が心の傷にしみる…痛い…

「俺は…優しく…なんか…」

声が震えて自分でも何を言っているのか分からない

「怒りつぽくて喧嘩っ早くても何事も一生懸命で優しいから皆が大好きなんでしょう？」

今の言葉を聞いた瞬間、涙が出てしまった。

その瞬間涙を堪えていたネジが緩んだのか俺は泣いてしまった
こんなに泣いたのは初めてだ。

痛みも涙に流されていくように消えていく

しよくぱんまんは俺が泣いている間背中をさすってくれていた
そんな優しいことをしたら余計涙が出てしまう

どれぐらい経ったのか分からないが俺の涙はようやく止まったようだ
「ごめん…ありがとう…」

俺の目が赤く腫れているのは自分でもわかる

「あー！ー！ー！！」

「どうしたんだよ」

「もうすぐお昼なのに食パン運んで無かった！ー！」

「おい、もうすぐ12時になるぞ」

「急がないと子供たちが待っています！」

「しゃーねーな！俺が手伝ってやるよ！ー！」

「有難う御座います！」

普段キザで気にくわれない奴だと思っていたけど、やっぱり仲間思い
な奴だなあ…

さすがプレイボーイ。ドキンちゃんが好きになるのも今何となくわ
かる気がする

「そんなに私を見つめて…そんなに私のことが好きですか？」

「違えよ！ー！」

「はっはっはカレーパンマンは素直じゃないですね」

… やっぱり分かんない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912ba/>

心の痛み

2012年1月7日16時54分発行